

飯塚堰の由来

飯塚を歩く

8月から9月初旬にかけて千潟八万石は黄金色の広がりを見せています。

ふれあいパーク八日市場に隣接する飯塚沼農村公園内にある沼は「飯塚堰」と呼ばれ、椿新田干拓後の1673（延宝元）年ごろに干拓地を取り囲むように造られた13の「溜井」の「溜井」の一つでした。溜井堰は椿の海沿岸の古村（新田村に対する親村）からの排水や湧き水、雨水などをためるため、水田を潰しため池に改造し、新田村の水源としたものでした。

市域には大寺村に「亀城堰」、椿村に「馬洗堰」、飯塚村の「蛭田堰」の3カ所が築造され、この蛭田堰がいつ頃



ハスの広がる飯塚沼

から飯塚堰と呼ばれるようになったかはわかりません。

「惣堀（廻し堀）」は干拓地の周りを一周する延長約40キロにおよぶ排水路で、溜め池とつなぐことよって新田内の用水補給の役割を担っていました。

しかし、これだけでは干拓地に必要な水を十分に得ることができず、新川の掘削によって下流の干拓地より標高の高い水田では地下水位が低下し水不足となりました。また、干ばつなどもあり用排水をめぐる近隣村間での争いは絶えることがなく、椿新田の歴史は「水争いの歴史」とまで言われました。

大正末から昭和の初めの大干ばつで甚大な被害があり、利根川に水源を求める「大利根用水計画」ができ、事業は県営、さらに国営として進められ、令和5年度に長きにわたる事業が完了し、現在に至っています。

筆者の記憶では、ふれあいパーク八日市場周辺に豊和中学校校舎があり、同校が現在の八日市場第一中学校に統合された1963（昭和38）年以降に撮られた桜並木に囲まれた廃校後の様子、飯塚沼の沼浚いでコイやフナ、ウナギなどを捕っている昭和30年代の写真を見たことがあります。

築造されて300年、溜井堰は数カ所が公園などに形を変えて残され、黄金色の稲田に目をやりながら、椿の海の歩みに想いをはせました。

（市文化財審議会委員・依知川雅一）

【秘書課 広報広聴班 ☎73・0080】